

平成30年度「宇都宮市学校教育推進懇談会」会議録

■ 日 時 平成30年10月17日（水）10：00～11：30

■ 会 場 宇都宮市庁舎14A会議室

■ 出席者

委 員： 藤井 佐知子 会長，福田 治久 副会長，大森 幹夫 委員，松村 典男 委員，
今井 政範 委員，上野 栄一 委員，村山 二郎 委員，栗原 武夫 委員，
佐々木 徳志 委員

事務局： 教育長，教育次長，学校教育担当次長，
教育企画課長，教育企画課総務担当主幹，学校管理課長，学校教育課長，
学校健康課長，生涯学習課長，文化課長，スポーツ振興課長補佐，
国体推進課長，教育センター所長，学校教育課課長補佐他

■ 委員からの主な意見・質問等（要旨）

○「第2次宇都宮市学校教育推進計画」について

松村委員：大変素晴らしい計画である。児童生徒の資質能力をつけるには、授業改善が一番のポイントであると思う。その中の「宇都宮モデル」のさわりの部分，特に本市として，自慢できるところ，強調していきたいところを教えていただきたい。

事務局：宇都宮モデルとは，宇都宮版「主体的・対話的で深い学び」であり，授業を「はっきり・じっくり・すっきり」という言葉で表している。主体的・対話的で深い学びを実現するために，問いを持つことや解決の見通しを立てる活動を通して，本時で行うことをはっきり理解させ，課題解決の意欲を持たせることを「はっきり」という言葉で表した。また，それらの活動に必要な教師の支援の一例もあげている。「じっくり」とは，自力で課題解決にあたることや交流して課題解決にあたる活動を通して，児童生徒一人一人の学びを見とり，適切に支援し，じっくり課題に取り組ませることである。また，それらの活動に必要な教師の支援の一例もあげている。「すっきり」とは，まとめることや振り返る活動を通して，課題に対する結論をすっきりまとめ，本時の学習を振り返らせることである。また，学んだことをしっかりと定着させることが大切で，そこから宿題等にもつなげていくことである。主体的・対話的で深い学びを推進していくにあたり，本市では，誰にでも分かりやすい「はっきり・じっくり・すっきり」という言葉を用いて，すべての教員に伝えて，この授業の実現に向けて努力しているところである。

松村委員：大変分かりやすく，良いと思う。通常の学級の中で，ときどき困り感をもってしまふ，分かる・できるにつまづく子供たちをどうしていくかが非常に大きな課題である。支援が必要な子供はもちろん，更に自分の能力を伸ばす必要がある子供，特に，その中間にいる子供をどう引き上げていくか，そのあたりが大事になると思う。

今井委員：内容は，大変素晴らしい。小1の課題として，小学校の入口のところで，子どもたちをどう受け入れようとしているのかを教えていただきたい。

事務局：第2次推進計画では，基本目標5「地域とともにある学校づくりを進める」基

本施策（３）「地域と連携・協働した学校づくりの推進」の中で、小学校と幼稚園・保育所の連携を図る「幼保小連携事業」の推進が挙げられている。学校においては、生活科をもとにしたスタートカリキュラムを充実させている。先生方相互の交流や園児との交流活動も充実しており、今後も引き続き行っていく。

今井委員：地域によってはつながりがあるが、温度差がある。そうでないところもある。地域に任せることも大切だが、上からのプッシュも大切である。

○「第２次宇都宮市学校教育スタンダード」について

藤井会長：第２次推進計画を、学校現場に分かりやすくおろした形になっている。内容、作り方はどうか。盛り込むべき内容に過不足はあるのかご意見をいただきたい。

松村委員：「特別な支援を必要とする児童生徒への指導力向上」「かがやきルームにおける指導の充実」とあるが、通常学級の先生の中には、自分のところとは関係ないことと受け取ってしまうことが考えられる。小学校学習指導要領解説総則編には、「通常の学級にも、障害のある児童のみならず、教育上特別の支援を必要とする児童が在籍している」と書かれている。LDやADHDとは断定できなくても、その傾向のある一般の児童生徒も対象になるという文言にしてはどうか。通常学級という言葉を入れてはどうか。通常学級の先生にも分かってもらえるようすると良い。

藤井会長：作る段階で留意していただきたい。

学校現場では、学校教育スタンダードはどのように活用されているのか。

栗原委員：年度当初に市全体の重点目標が示されており、年度末には学校教育スタンダードの進捗状況を示すことになっている。それらを各学校の経営方針に活かしている。

佐々木委員：これまでの学校教育スタンダードには到達目標が示されていた。到達目標があると、ありがたい反面、教員にはシビアである。到達目標は、育成という観点からすると、大きな意味がある。このレベルまであがるという保障、宇都宮という所の学力保障になっている。今回は、到達目標が書かれていないが、今後はどうなるのか。

藤井会長：参考に平成２９年度までの推進状況はどうなのか。また、到達目標の設定についてどう考えているか？

事務局：前回までは学校教育スタンダードに独自の到達目標を設定していた。進捗状況を見ると、指標となる学習定着度調査の正答率や学習や生活についてのアンケートの肯定的回答率では、いろいろな面から上昇している。基礎的基本的な知識・技能、望ましい生活習慣や態度が身に付いており、一定の成果が表れているものと考えている。第２次推進計画で示した目指す児童生徒の姿の他に、学校教育スタンダード独自の到達目標を設定する考えはない。推進計画と同じ、目指す児童生徒の姿を学校教育スタンダードにおいても共有するというところに重きを置いた。そのことで、学校現場は推進計画と学校教育スタンダードの関係がより鮮明になり、これまで以上に基本理念の実現に向けての取組に力強く推進できると考えた。同時に児童生徒の学力保障も図れると考えた。

- 藤井会長：計画策定時に指標が多く、先生方にもプレッシャーになるという意見があり、補足指標を設定した経緯もある。
- 佐々木委員：前回の学校教育スタンダードでは、目指す子供の姿（具体目標）がしっかりと示されていた。今回の学校教育スタンダードには、そのような具体目標が設定されるのか。今回は計画よりなものになっている。無いとすれば、今後、御検討いただきたい。
- 藤井会長：平成29年度推進状況に、学習と生活についてのアンケートを基にした数値があるが、アンケートは今後どうする予定か。
- 事務局：アンケートは今後も継続する。内容は推進計画に沿ったものとし、見直しを考えている。
- 藤井会長：どんなことをやって、どう変わっていくのかが大事である。小学校では、アンケートによって忙しくなったりしないのか。
- 栗原委員：そんなに時間はかからない。アンケートは有効で、現場把握に役立っている。
- 上野委員：学校は携帯電話の持ち込み禁止の状況である。「ノースマホデー」は誤解を招く恐れがあり、ノースマホデー以外は携帯を使っても捉えられるがどうなのか。
- 事務局：本日はノースマホデーである。中学生3年生の所持率は7割を超えており、スマホが関係したトラブルは増えている。ノースマホデーは、自分の依存状況や使用状況を見直す機会として設置している。そのため、小中学校にチラシを配布している。日頃の自分の依存状況を振り返る良い機会になることから、今後も続けたいと考えている。
- 佐々木委員：教育委員会の方針で携帯を持たせないという前提はありがたい。依存性が高い児童生徒もいるので、設定されていることは良い。
- 松村委員：イグノーベル賞をとった教え子の話では、ゲームやスマホは全く使わなかったら問題があると言っていた。使い方が問題である。全て取り上げるのではなく、自分でコントロールできるような繰り返しの指導が大事である。
- 村山委員：「1人1授業の実施」とはどういうことなのか。
- 事務局：1年間のうちに、1回は研究授業や公開授業を行うという意味である。
- 村山委員：一般に公開する時には、意味が分かるよう、言葉を補うべきである。
- 藤井会長：先生方のキャリアアップや職能成長においては、教員間のチーム力の向上が不可欠である。年齢構成がいびつになっていくことが予想され、先輩教員が若手を育てることが難しくなると思うが、この点に留意した教員の育成を期待したい。
- 事務局：キャリアステージに応じた教職員育成システムがあり、若手教員育成システムでは1年から5年目の教員を対象に、主に校内研修などを行っている。また、ミドルリーダー、管理職の育成の強化を今後図っていく予定である。
- 松村委員：公開授業後の協議では、グループ協議から発表などをするケースが多いが、協議内容等が深まっていない現状がある。参加者の様々な意見をもとに、それを比較したり、分類したり、関係付けたり、まとめたり、よりよく再構築したりするよう教師がファシリテートし（導き）、板書で構造的にまとめたりするような研修が必要である。筑波大附属小学校の盛山隆雄先生などの力のある講師

を招いて研修をすると良いと思う。

大森委員：マンションの自治会加入率は4割ぐらいである。そのため、学校の協力が不可欠である。学校と連携した防災訓練を催したが、親は引き渡し訓練のみ参加し、煙体験などのイベントには参加しない。できればやってもらいたい。親子さんへの教育が必要である。学校に任せきりになっている親もいる。先生方は授業以外の業務が大変な状況である。この状況を改善するためにも、学校と地域のつながりが大切である。

福田委員：P T Aが地域と学校をしっかりとつないでいくことが必要である。地域の皆さんとしっかりと連携を図っていききたい。学校教育スタンダードがゴールという考え方は難しいのではないか。あるべき姿とのギャップが難しい。

今年は猛暑や台風など災害が多かった。可能であれば、体育館に冷暖房をつけられないか。お金がかかることは分かっているが、猛暑が続くような場合には、考えなくてはいけない。

事務局：体育館は避難所の役割がある。構造的に大きな空調をつけなくてはいけない。莫大な費用がかかる。他市町の状況も踏まえて、研究をする。現状では難しい。普通教室は100%配置してある。音楽室・図書室も100%設置してある。今後調整をする。

大森委員：今泉小は、P T Aから大きな扇風機を2台寄附いただいた。

村松委員：学校教育スタンダードを出す場合、先生方は全員見ることになる。漢字の使い方に注意が必要である。別紙2-1左側「ともに」は漢字。別紙1「子ども」は漢字で書くようにするべきである。漢字の使い方をもう一度確認すると良い。